

家庭での離乳食づくりの実態ならびに乳幼児向けの 非常食の備蓄状況

Preparation of Baby Food at Home and Building an Emergency Stockpile of Food for Infants

| | | |
|---------------|-----------------|-------------------|
| 中岡 加奈絵*** | 野田 聖子* | 山田 麻子* |
| Kanae NAKAOKA | Seiko NODA | Asako YAMADA |
| 奥 裕 乃*** | 定行 まり子**** | 五関-曾根 正江* |
| Yuno OKU | Mariko SADAYUKI | Masae GOSEKI-SONE |

要約 家庭における離乳食作りの実態ならびに乳幼児向けの非常食の備蓄状況の把握を目的とし、質問紙調査を実施した。その結果、核家族世帯では離乳食作りの際に「市販のベビーフードのアレンジ」を活用していた者の割合、子どもが一人っ子の場合は離乳食を進める際の困りごととして「作り方が分からない」と回答した者の割合が有意に高いことが示された。離乳開始前の子ども向けに粉ミルクを備蓄していた者は75.4%であり、そのうち67.3%が「調乳用の水」、38.8%が「プラスチック製の哺乳瓶や乳首」も備蓄していた。離乳期の子どもの向けに「市販の離乳食」を備蓄していた者の割合は65.6%であった。本研究結果より、家族構成を配慮した離乳食の支援や、乳幼児向けの非常食の備蓄のための家庭への情報提供や支援の必要性が示された。

キーワード：離乳食，乳幼児，家庭，福島県，非常食

Abstract A survey was conducted in order to determine the extent to which baby food is prepared at home and whether emergency food for infants is stockpiled. Results indicated that a large percentage of respondents in a nuclear family adapted “commercially available baby food products” and that a large percentage of respondents with a single child “do not know how to make [baby food],” which was a problem when transitioning to baby food. Of the respondents, 75.4% had stockpiled baby formula for nursing children. Of those respondents, 67.3% had stocked up on “water to prepare formula” and 38.8% had stocked up on “plastic feeding bottles and nipples.” Of the respondents who were weaning children, 65.6% had stockpiled “commercially available baby food products.” Results indicated that assistance with baby food needs to be provided in light the family structure and that information and support are needed regarding building an emergency stockpile of food for infants.

* 日本女子大学 家政学部 食物学科
Department of Food and Nutrition, Faculty of Human
Sciences and Design, Japan Women's University

** 十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科
Department of Food and Nutrition, Faculty of Human Life,
Jumonji University

***日本女子大学大学院 人間生活学研究科 人間発達学専攻
Graduate School of Human Life Science, Division of
Human Development, Japan Women's University

**** 日本女子大学 家政学部 住居学科
Department of Housing and Architecture, Faculty of
Human Sciences and Design, Japan Women's University

Key words : Baby food, Infant, Home,
Fukushima Prefecture, Emergency food

1. 緒言

乳幼児栄養調査結果¹⁾によると、離乳食について困ったことは「特にない」と回答した保護者が25.9%であり、約75%の保護者が離乳食になんらかの困りごとを抱えていることが報告されている。幼

児については、子どもの食事で困っていることは「特にない」と回答した者の割合が、5歳以上の保護者で22.5%と最も高く、4～5歳未満の保護者で16.4%、3～4歳未満の保護者で16.8%、2～3歳未満の保護者で13.0%であり、約8割の保護者が子どもの食事になんらかの困りごとを抱えていることが報告されている。幼児の保護者を対象とした別の調査においては、食事についての心配事がある者は、食事についての心配事がない者に比べて、「育児に自信がもてない」、「子育てに困難を感じる」割合が高いということが示されている²⁾。これらより、保護者が個々に置かれている状況を配慮し、特に低年齢の子どもを養育している子育て家庭を中心とした支援を行い、子どもの食に関する悩みを解消する必要があると考えられた。これまでの研究においては、母親の調理技術の取得状況と離乳食への不安との関連³⁾、離乳食の調理方法の経年変化⁴⁾等の報告がなされているが、世帯構成等を考慮した離乳食の実態に関する報告や、子どもの月齢・年齢に応じて変化する個々の困りごとと関連する要因についての報告は見当たらず、具体的な支援に結びつけられるような資料を得るための検討が望まれる。

非常食に関しては、東日本大震災から2年半後に実施された調査において、特殊食品の備蓄について地域防災計画・ガイドライン・マニュアル等に示されている自治体のうち、行政として乳児用ミルクを備蓄していたのは68.1%、ベビーフードは8.5%、アレルギー対応食品は38.3%であり、乳幼児を対象とした特殊食品の備蓄はほとんど進んでいないことが報告されている⁵⁾。保育施設は、幅広い月齢・年齢の園児の保育の場であり、福祉避難所となることもあることから、我々はこれまでに保育施設を対象に調査を行い、保育施設における非常食の備蓄状況には地域差があり、管理栄養士・栄養士の配置の有無が影響すること、備蓄内容や量に課題がみられること等を報告してきた^{6),7)}。一般家庭における非常食の備蓄状況については数多く報告がなされているが^{8),9)}、乳幼児のいる家庭における非常食の備蓄状況の実態は明らかになっていない。乳幼児のいる家庭においては、成長・発達過程に応じた子ども向けの非常食として、特殊食品である育児用ミルクやベビーフード等が必要となることから、家庭における備蓄状況の実態を把握した上で必要な情報提供や支援を行う必要があると考えられる。

そこで本研究では、離乳食に関しては、世帯構成や離乳食づくり担当者の調理に対する考えが、離乳食を進める際の困りごとや離乳食づくりの状況と関連しているという仮説を立て、家庭での離乳食づくりの実態把握を目的とした調査を実施した。非常食に関しては、乳幼児向けに非常食を備蓄することの必要性を感じながらも備蓄できていない家庭が多い、母乳栄養でも育児用ミルクの備蓄が推進されているが子育て家庭には周知されていない、育児用ミルクの備蓄があっても哺乳瓶や調乳用の水等の備蓄は十分ではない、食物アレルギーを持つ子どもの家庭においても非常食の備蓄が不十分であるという仮説を立て、非常食の備蓄の実態把握と乳幼児向けの非常食の備蓄状況に関連する事項について検討することを目的に調査を実施した。

2. 方法

(1) 対象と質問紙調査

2019年12月時点で、福島県内のSこども園に在籍する園児の保護者67名を対象とした。無記名の自記式質問紙を用い、質問紙調査を実施した。世帯構成に関する内容として、家族構成と子どもの人数を尋ね、核家族か否か、きょうだいの有無を判断した。

1. 離乳食づくりの実態

離乳食づくり担当者の調理に対する考えについては、「離乳食づくりを担当していた／している方の普段の調理に対する考えに○をつけてください。」の項目を設定し、以下の三つの視点について回答を求めた。まず、調理することは「好き」、「どちらか」というと好き、「どちらか」というと好きではない、「好きではない」の4つの選択肢から選択してもらい、解析では「好き」、「好きではない」に2分した。次に、調理することは「得意」、「どちらか」というと得意、「どちらか」というと苦手、「苦手」の4つの選択肢から選択してもらい、解析では「得意」、「得意でない」に2分した。さらに、調理することは「苦にならない」、「ほとんど苦にならない」、「ときどき苦になる」、「苦になる」の4つの選択肢から選択してもらい、解析では「苦にならない」、「苦になる」に2分した。

離乳食づくりの状況については、「離乳食づくりの際に役立つ方法として、知っていたものはありま

すか。」「離乳食づくりの際に活用していた方法がありますか。」と尋ね、「まとめて作って冷凍保存」、「大人の食事からの取り分け」、「離乳食の大人の料理へのアレンジ（ペースト状にした食材を大人の料理のソースやドレッシングに使う、等）」、「市販のベビーフードのアレンジ」、「電子レンジの活用」の中からそれぞれあてはまるものを選択してもらった。

離乳食を進める際の困りごとについては、乳幼児栄養調査¹⁾を参考に項目を設定した。離乳食を進める際の困りごととして、保護者の状況を把握するため、「離乳食を進める際に、次のようなことで、困ったことがありましたか。これから開始する方は、困りそうなことがありますか。」と尋ね、「作り方がわからない」、「作るのが負担、大変」、「離乳食のバリエーションが少ない」、「食べさせ方がわからない」、「時期にあった調理形態がわからない」の中からあてはまるものを全て選択してもらい、それぞれについて、自由記述形式で具体的な内容の回答も求めた。離乳食を進める際の困りごととして、子どもの様子を把握するため、「離乳食を進める際にお子さんの食事で困った／困っていることはありましたか。」と尋ね、「食べる量が少ない」、「食べる量が多い」、「食べものをいつまでも口にためている」、「食べるのを嫌がる」、「もぐもぐ、かみかみが少ない（丸のみしている）」、「食べものの種類が偏っている」、「その他」の中からあてはまるものを全て選択してもらい、その他については具体的な内容の回答も求めた。いずれも、ひとつ以上選択している場合、困りごと「あり」とみなした。食物アレルギーの有無については、「お子さんは乳児期に食物アレルギーと診断されたことはありますか。」と尋ね、「はい」か「いいえ」のいずれかに回答を求めた。

2. 乳幼児向けの非常食の備蓄状況

非常食の備蓄状況に関わる項目については、調査時点で在園している子どもについての回答を求めた。項目の設定の際は、授乳・離乳の支援ガイド¹⁰⁾や妊産婦・乳幼児を守る災害対策ガイドライン¹¹⁾を参考にした。まず、「離乳食の開始前の時期のご自身のお子さん向けに、育児用ミルクを備蓄していますか／していましたか。」と尋ね、「している／していた」場合は、備蓄している／していたものとして、「粉ミルク」、「液体ミルク」、「プラスチック製の哺乳瓶や乳首」、「紙コップやスプーン」、「調乳用の水」の

中からあてはまるもの全てを選択してもらった。備蓄を「していない／していなかった」場合は、理由について、自由記述形式で回答も求めた。次に「離乳期のご自身のお子さん向けに、非常食を備蓄していますか／していましたか。」と尋ね、「している／していた」場合は、備蓄している／していたものとして、「市販のベビーフード」、「育児用ミルク」、「子ども向けにアレンジして与えられる大人用の非常食（例：おかゆなど）」、「その他」の中からあてはまるものを全て選択してもらい、市販のベビーフードについては備蓄日数、その他については具体的な内容の回答も求めた。備蓄を「していない／していなかった」場合は、理由について、自由記述形式で回答を求めた。

乳幼児向けの非常食の備蓄に対する考えとして、「離乳の完了までの時期に、ご自身のお子さんのためにご家庭で非常食（離乳食や育児用ミルク）を備蓄することの必要性についてどのようにお考えですか。」と尋ね、「かなり必要性を感じる」、「少し必要性を感じる」、「あまり必要性を感じない」、「必要性を感じない」の4段階で回答を求めた。また、乳幼児期の非常食の備蓄状況には、子どもの栄養法が関わっていると考え、乳幼児栄養調査¹⁾を参考に、対象者の子どもが生後1か月頃、生後3か月頃の栄養法として、「母乳栄養」、「混合栄養」、「人工栄養」の中からあてはまるものをそれぞれ選択してもらった。

(2) 解析方法

質的データは χ^2 検定にて検討した。なお、クロス集計表で期待度数が5未満のセルが全てのセルに対して20%以上ある場合には、Fisherの正確確率検定を用いた。

統計解析には統計ソフト IBM SPSS Statistics 26（日本アイ・ビー・エム株式会社）を使用し、有意水準は両側検定で5%とした。

(3) 倫理的配慮

本研究は、調査の目的や方法、プライバシーの保護、倫理的配慮について書面にて説明し、同意を得た上で行った。なお、本研究は日本女子大学倫理審査委員会において、審査を受け、承認を得たものである（倫理審査委員会承認番号：第329号）。

3. 結果

質問紙への回答は、対象者全員から得られた（有効回収率・回答率ともに100%）。対象者のうち、約65%の43名が核家族世帯に該当した。対象とした家庭の子どもの人数を尋ねた結果、対象者の子どものきょうだいがいない、一人っ子の割合は、全体の約30%の21名であった。

(1) 離乳食づくりの実態

離乳食づくり担当者の調理に対する考えについて、調理することは「好き」と回答したのは12名（17.9%）、「どちらかというが好き」は28名（41.8%）、「どちらかという好きではない」は17名（25.4%）、「好きではない」は3名（4.5%）、未回答は7名（10.4%）であった。調理することは「得意」と回答したのは6名（9.0%）、「どちらかという得意」は24名（35.8%）、「どちらかという苦手」は25名（37.3%）、「苦手」は4名（6.0%）、未回答は8名（11.9%）であった。調理することは「苦にならない」と回答したのは8名（11.9%）、「ほとんど苦にならない」は9名（13.4%）、「ときどき苦になる」は37名（55.2%）、「苦になる」は5名（7.5%）、未回答は8名（11.9%）であった。調理することが「苦になる」と回答したのは、調理することが「好き」な者では23名（59.0%）おり、調理することが「好きではない」者では19名（95.0%）であった（ $p<0.01$ ）。

Table 1 に離乳食づくりで知っていた調理方法を示した。「まとめて作って冷凍保存」と回答したのは55名（82.1%）、「大人の食事からの取り分け」と「電子レンジの活用」はいずれも47名（70.1%）であり、「市販のベビーフードのアレンジ」は37名（55.2%）、「離乳食の大人の料理へのアレンジ」は13名（19.4%）と続いた。離乳食づくりで活用していた調理方法については、**Table 2** に示した。「まとめて作って冷凍保存」と回答したのは50名（74.6%）であり、「大人の食事からの取り分け」は48名（71.6%）、「電子レンジの活用」は45名（67.2%）、「市販のベビーフードのアレンジ」は28名（41.8%）、「離乳食の大人の料理へのアレンジ」は11名（16.4%）と続いた。核家族世帯では離乳食づくりで知っていた調理方法として「市販のベビーフードのアレンジ」と回答した者の割合が有意に高

値を示し、実際に活用していた者の割合においても有意に高値を示した（それぞれ $p<0.01$, $p<0.05$ ）。また、離乳食づくり担当者が調理することが「好き」と回答した場合は、調理することが「好きではない」と回答した場合と比べて、離乳食を「まとめて作って冷凍保存」していた者の割合が有意に高いことが示された（ $p<0.05$ ）。また、調理をすることは「苦になる」と回答した者は、「苦にならない」と回答した者と比較し、「電子レンジの活用」の質問項目で「活用していた」と回答した者の割合が、「活用しなかった」を選択した者の割合よりも低値傾向を示した（ $p=0.082$ ）。なお、表には示していないが、知っていた調理方法を実際に活用していた者の割合は、「大人の食事からの取り分け」が93.6%、「まとめて作って冷凍保存」が89.1%、「電子レンジの活用」が80.9%、「市販のベビーフードのアレンジ」が73.0%、「離乳食の大人の料理へのアレンジ」が61.5%であった。

離乳食を進める際の困りごととして、保護者に関する状況についてまとめたのが **Table 3** である。困りごとがあるのは、47名（70.1%）であった。その内訳は、多い順に「作るのが負担、大変」が36名（55.4%）、「離乳食のバリエーションが少ない」が25名（38.5%）、「作り方がわからない」が11名（16.9%）、「食べさせ方がわからない」と「時期にあった調理形態がわからない」がそれぞれ4名（6.0%）であった。「作るのが負担、大変」の具体的な内容としては、「食材をなめらかにつぶすこと、細かく刻むこと」、「少量を作ること」、「だしをとること」、「やわらかくなるまで長く煮込むこと」、「作り置きするのに時間がかかってしまうこと、調理の時間を確保すること」、「小分けに保存しても使い切ることができないこと」、「味を変えたり、バリエーションを増やすこと」、「大人とは別メニューとして作ること」、「子どもを見ながら調理すること」、「使った調理器具を洗うこと」、「新鮮で安全なものは価格が高いこと」等の記述が得られた。「作り方がわからない」の具体的な内容としては、「味つけ、大きさ、やわらかさ等の加減」、「調理時の水加減」、「調理時間（どのタイミングから時間を計ればよいのか）」等の記述が得られた。「離乳食のバリエーションが少ない」と回答した者の中には、「普段あまり買わない食材のメニューもあったので離乳食を作るためだけに材料を買ったことがあった」、「本や

ネットにのっているものはオシャレすぎて参考にならなかった」と記述していた者がいた。「食べさせ方がわからない」と回答した者からは、「アレルギーが出やすい食材については1さじ1さじ恐怖感があった」、「どのタイミングから子ども自身で食べさせてもよいのが分からなかった」等の記述が得られた。子どもが一人っ子的場合は、離乳食を進める際の困りごととして「作り方がわからない」と回答した者の割合が有意に高く ($p<0.05$)、「食べさせ方がわからない」と回答した者の割合が高値傾向であることが示された ($p=0.095$)。また、離乳食づくり担当者が調理することが「好き」と回答した場合は、調理することは「好きではない」と回答した場合と比べて、離乳食の「作り方がわからない」と

回答した者の割合が有意に低値を示した ($p<0.05$)。離乳食づくり担当者が調理することが「得意」と回答した場合は「得意でない」と回答した場合と比べて、調理することが「苦にならない」と回答した場合は「苦になる」と回答した場合と比べて、困りごとがある者の割合が有意に低いことが示された (いずれも $p<0.01$)。具体的な内容としては、離乳食づくり担当者が調理することが「得意」と回答した場合、調理することが「得意でない」と回答した場合と比べて、離乳食の「バリエーションが少ない」ことを困りごととしてあげた者の割合が有意に低く、離乳食の「作り方がわからない」ことを困りごととしてあげた者の割合が低値傾向を示した ($p=0.079$)。離乳食づくり担当者が

Table 1 Cooking methods used to prepare baby food that participants knew

| | 家族構成 | | ρ 値 [‡] | きょうだいの有無 | | ρ 値 [‡] | | |
|------------------------|---------------|------------------|-----------------------|--------------|-----------------|-----------------------|------------------|----------------|
| | 核家族 (n=43) | その他 (n=24) | | なし (n=21) | あり (n=46) | | | |
| | n† (%) | | | | | | | |
| まとめて作って冷凍保存 | | | | | | | | |
| 知っていた | 34 (79.1) | 21 (87.5) | 0.304 | 15 (71.4) | 40 (87.0) | 0.118 | | |
| 知らなかった | 9 (20.9) | 3 (12.5) | | 6 (28.6) | 6 (13.0) | | | |
| 大人の食事からの取り分け | | | | | | | | |
| 知っていた | 30 (69.8) | 17 (70.8) | 0.578 | 15 (71.4) | 32 (69.6) | 0.559 | | |
| 知らなかった | 13 (30.2) | 7 (29.2) | | 6 (28.6) | 14 (30.4) | | | |
| 離乳食の大人の料理へのアレンジ | | | | | | | | |
| 知っていた | 9 (20.9) | 4 (16.7) | 0.468 | 4 (19.0) | 9 (19.6) | 0.620 | | |
| 知らなかった | 34 (79.1) | 20 (83.3) | | 17 (81.0) | 37 (80.4) | | | |
| 市販のベビーフードのアレンジ | | | | | | | | |
| 知っていた | 30 (69.8) | 7 (29.2) | 0.002 | 12 (57.1) | 25 (54.3) | 0.522 | | |
| 知らなかった | 13 (30.2) | 17 (70.8) | | 9 (42.9) | 21 (45.7) | | | |
| 電子レンジの活用 | | | | | | | | |
| 知っていた | 29 (67.4) | 18 (75.0) | 0.360 | 12 (57.1) | 35 (76.1) | 0.101 | | |
| 知らなかった | 14 (32.6) | 6 (25.0) | | 9 (42.9) | 11 (23.9) | | | |
| | 調理することは | | ρ 値 [‡] | 調理することは | | ρ 値 [‡] | | |
| | 好き (n=40) | 好きではない (n=20) | | 得意 (n=30) | 得意でない (n=29) | | 苦にならない (n=17) | 苦になる (n=42) |
| | | | | | | | | |
| まとめて作って冷凍保存 | | | | | | | | |
| 知っていた | 36 (90.0) | 12 (60.0) | 0.010 | 27 (90.0) | 21 (72.4) | 0.080 | | |
| 知らなかった | 4 (10.0) | 8 (40.0) | | 3 (10.0) | 8 (27.6) | | 16 (94.1) | 32 (76.2) |
| 大人の食事からの取り分け | | | | | | | | |
| 知っていた | 27 (67.5) | 16 (80.0) | 0.242 | 22 (73.3) | 21 (72.4) | 0.584 | | |
| 知らなかった | 13 (32.5) | 4 (20.0) | | 8 (26.7) | 8 (27.6) | | 14 (82.4) | 29 (69.0) |
| 離乳食の大人の料理へのアレンジ | | | | | | | | |
| 知っていた | 9 (22.5) | 2 (10.0) | 0.208 | 7 (23.3) | 4 (13.8) | 0.273 | | |
| 知らなかった | 31 (77.5) | 18 (90.0) | | 23 (76.7) | 25 (86.2) | | 4 (23.5) | 7 (16.7) |
| 市販のベビーフードのアレンジ | | | | | | | | |
| 知っていた | 19 (47.5) | 14 (70.0) | 0.084 | 15 (50.0) | 17 (58.6) | 0.344 | | |
| 知らなかった | 21 (52.5) | 6 (30.0) | | 15 (50.0) | 12 (41.4) | | 7 (41.2) | 25 (59.5) |
| 電子レンジの活用 | | | | | | | | |
| 知っていた | 30 (75.0) | 12 (60.0) | 0.184 | 24 (80.0) | 18 (62.1) | 0.109 | | |
| 知らなかった | 10 (25.0) | 8 (40.0) | | 6 (20.0) | 11 (37.9) | | 15 (88.2) | 27 (64.3) |

†未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。

‡質問項目に対する回答の割合は、未回答を除いた割合を示した。

*カイ二乗検定またはFisherの正確確率検定

Table 2 Cooking methods used to prepare baby food

| | 家族構成 | | p値 [‡] | きょうだいの有無 | | p値 [‡] | | |
|------------------------|---------------|------------------|-----------------|------------------|-----------|-----------------|--------------|-----------------|
| | 核家族 (n=43) | その他 (n=24) | | なし (n=21) | | | あり (n=46) | |
| | | | | n† (%) | | | | |
| まとめて作って冷凍保存 | | | | | | | | |
| 活用していた | 32 (74.4) | 18 (75.0) | 0.600 | 13 (61.9) | 37 (80.4) | 0.096 | | |
| 活用しなかった | 11 (25.6) | 6 (25.0) | | 8 (38.1) | 9 (19.6) | | | |
| 大人の食事からの取り分け | | | | | | | | |
| 活用していた | 32 (74.4) | 16 (66.7) | 0.344 | 12 (57.1) | 36 (78.3) | 0.070 | | |
| 活用しなかった | 11 (25.6) | 8 (33.3) | | 9 (42.9) | 10 (21.7) | | | |
| 離乳食の大人の料理へのアレンジ | | | | | | | | |
| 活用していた | 7 (16.3) | 4 (16.7) | 0.610 | 4 (19.0) | 7 (15.2) | 0.473 | | |
| 活用しなかった | 36 (83.7) | 20 (83.3) | | 17 (81.0) | 39 (84.8) | | | |
| 市販のベビーフードのアレンジ | | | | | | | | |
| 活用していた | 22 (51.2) | 6 (25.0) | 0.033 | 9 (42.9) | 19 (41.3) | 0.556 | | |
| 活用しなかった | 21 (48.8) | 18 (75.0) | | 12 (57.1) | 27 (58.7) | | | |
| 電子レンジの活用 | | | | | | | | |
| 活用していた | 28 (65.1) | 17 (70.8) | 0.422 | 12 (57.1) | 33 (71.7) | 0.184 | | |
| 活用しなかった | 15 (34.9) | 7 (29.2) | | 9 (42.9) | 13 (28.3) | | | |
| | 調理することは | | p値 [‡] | 調理することは | | 調理することは | | p値 [‡] |
| | 好き (n=40) | 好きではない (n=20) | | 得意 (n=30) | | 得意でない (n=29) | | |
| | | | | 苦にならない (n=17) | | 苦になる (n=42) | | |
| まとめて作って冷凍保存 | | | | | | | | |
| 活用していた | 34 (85.0) | 11 (55.0) | 0.015 | 25 (83.3) | 20 (69.0) | 15 (88.2) | 30 (71.4) | 0.150 |
| 活用しなかった | 6 (15.0) | 9 (45.0) | | 5 (16.7) | 9 (31.0) | 2 (11.8) | 12 (28.6) | |
| 大人の食事からの取り分け | | | | | | | | |
| 活用していた | 27 (67.5) | 16 (80.0) | 0.242 | 22 (73.3) | 21 (72.4) | 14 (82.4) | 29 (69.0) | 0.240 |
| 活用しなかった | 13 (32.5) | 4 (20.0) | | 8 (26.7) | 8 (27.6) | 3 (17.6) | 13 (31.0) | |
| 離乳食の大人の料理へのアレンジ | | | | | | | | |
| 活用していた | 7 (17.5) | 1 (5.0) | 0.176 | 4 (13.3) | 4 (13.8) | 2 (11.8) | 6 (14.3) | 0.582 |
| 活用しなかった | 33 (82.5) | 19 (95.0) | | 26 (86.7) | 25 (86.2) | 15 (88.2) | 36 (85.7) | |
| 市販のベビーフードのアレンジ | | | | | | | | |
| 活用していた | 14 (35.0) | 9 (45.0) | 0.318 | 11 (36.7) | 11 (37.9) | 5 (29.4) | 17 (40.5) | 0.312 |
| 活用しなかった | 26 (65.0) | 11 (55.0) | | 19 (63.3) | 18 (62.1) | 12 (70.6) | 25 (59.5) | |
| 電子レンジの活用 | | | | | | | | |
| 活用していた | 29 (72.5) | 11 (55.0) | 0.144 | 22 (73.3) | 17 (58.6) | 14 (82.4) | 25 (59.5) | 0.082 |
| 活用しなかった | 11 (27.5) | 9 (45.0) | | 8 (26.7) | 12 (41.4) | 3 (17.6) | 17 (40.5) | |

†未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。

‡質問項目に対する回答の割合は、未回答を除いた割合を示した。

‡カイニ乗検定またはFisherの正確確率検定

調理することが「苦にならない」と回答した場合は、調理することが「苦になる」と回答した場合と比べて、離乳食の「作り方が分からない」こと、離乳食を「作るのが負担、大変」だということを困りごととしてあげた者の割合が低値傾向を示した（それぞれ $p=0.091$, $p=0.060$ ）。さらに、表には示していないが、離乳食を「作るのが負担、大変」だと回答した者では、そうでない者と比較し、離乳食づくりで知っていた調理方法として「まとめて作って冷凍保存」、「離乳食の大人の料理へのアレンジ」を選択した者の割合が有意に低値を示し（いずれも $p<0.05$ ）、「電子レンジの活用」を選択した者の割合が低値傾向を示した（ $p=0.050$ ）。また、離乳食づくりで活用していた調理方法として、「離乳食の大人の料理

へのアレンジ」を選択した者の割合が有意に低値を示した（いずれも $p<0.01$ ）。

離乳食を進める際の困りごととして、子どもの様子についてまとめたのが Table 4 である。困りごとがあるのは、46名（68.7%）であった。その内訳は、多い順に「食べものの種類が偏っている」が22名（32.8%）、「もぐもぐ、かみかみが少ない（丸のみしている）」が18名（26.9%）、「食べる量が少ない」が15名（22.4%）、「食べるのを嫌がる」が9名（13.4%）、「食べる量が多い」が5名（7.5%）、「食べものをいつまでも口にためている」が3名（4.5%）であった。「その他」と回答した7名からは、「離乳食を始めたらず下痢になった」、「かたさや大きさが本の通りに進まなかった」、「離乳食後のミルクを飲み

Table 3 Problems when transitioning to baby food (for parents)

| | n† (%) | | | | | |
|-------------------------|---------------|---------------|-------|--------------|--------------|-------|
| | 家族構成 | | | ぎょうだいの有無 | | |
| | 核家族 (n=43) | その他 (n=24) | p値‡ | なし (n=21) | あり (n=46) | p値‡ |
| 困りごとの有無 | | | | | | |
| あり | 31 (72.1) | 16 (66.7) | 0.422 | 16 (76.2) | 31 (67.4) | 0.334 |
| なし | 12 (27.9) | 8 (33.3) | | 5 (23.8) | 15 (32.6) | |
| 作り方が分からない | | | | | | |
| あてはまる | 8 (18.6) | 3 (13.6) | 0.449 | 7 (33.3) | 4 (9.1) | 0.021 |
| あてはまらない | 35 (81.4) | 19 (86.4) | | 14 (66.7) | 40 (90.9) | |
| 作るのが負担、大変 | | | | | | |
| あてはまる | 26 (60.5) | 10 (45.5) | 0.187 | 12 (57.1) | 24 (54.5) | 0.529 |
| あてはまらない | 17 (39.5) | 12 (54.5) | | 9 (42.9) | 20 (45.5) | |
| 離乳食のバリエーションが少ない | | | | | | |
| あてはまる | 17 (39.5) | 8 (36.4) | 0.511 | 8 (38.1) | 17 (38.6) | 0.594 |
| あてはまらない | 26 (60.5) | 14 (63.6) | | 13 (61.9) | 27 (61.4) | |
| 食べさせ方が分からない | | | | | | |
| あてはまる | 3 (7.0) | 1 (4.5) | 0.583 | 3 (14.3) | 1 (2.3) | 0.095 |
| あてはまらない | 40 (93.0) | 21 (95.5) | | 18 (85.7) | 43 (97.7) | |
| 時期にあった調理形態が分からない | | | | | | |
| あてはまる | 4 (9.3) | 0 (0.0) | 0.182 | 2 (9.5) | 2 (4.5) | 0.389 |
| あてはまらない | 39 (90.7) | 22 (100.0) | | 19 (90.5) | 42 (95.5) | |

| | 調理することは | | | 調理することは | | | 調理することは | | |
|-------------------------|----------------|------------------|-------|--------------|-----------------|-------|------------------|----------------|-------|
| | 好き (n=40) | 好きではない (n=20) | p値‡ | 得意 (n=30) | 得意でない (n=29) | p値‡ | 苦にならない (n=17) | 苦になる (n=42) | p値‡ |
| | 困りごとの有無 | | | | | | | | |
| あり | 29 (72.5) | 17 (85.0) | 0.228 | 18 (60.0) | 27 (93.1) | 0.003 | 8 (47.1) | 37 (88.1) | 0.002 |
| なし | 11 (27.5) | 3 (15.0) | | 12 (40.0) | 2 (6.9) | | 9 (52.9) | 5 (11.9) | |
| 作り方が分からない | | | | | | | | | |
| あてはまる | 4 (10.3) | 7 (36.8) | 0.022 | 3 (10.3) | 8 (28.6) | 0.079 | 1 (5.9) | 10 (25.0) | 0.091 |
| あてはまらない | 35 (89.7) | 12 (63.2) | | 26 (89.7) | 20 (71.4) | | 16 (94.1) | 30 (75.0) | |
| 作るのが負担、大変 | | | | | | | | | |
| あてはまる | 22 (56.4) | 13 (68.4) | 0.279 | 16 (55.2) | 18 (64.3) | 0.334 | 7 (41.2) | 27 (67.5) | 0.060 |
| あてはまらない | 17 (43.6) | 6 (31.6) | | 13 (44.8) | 10 (35.7) | | 10 (58.8) | 13 (32.5) | |
| 離乳食のバリエーションが少ない | | | | | | | | | |
| あてはまる | 15 (38.5) | 10 (52.6) | 0.229 | 8 (27.6) | 17 (60.7) | 0.012 | 5 (29.4) | 20 (50.0) | 0.126 |
| あてはまらない | 24 (61.5) | 9 (47.4) | | 21 (72.4) | 11 (39.3) | | 12 (70.6) | 20 (50.0) | |
| 食べさせ方が分からない | | | | | | | | | |
| あてはまる | 2 (5.1) | 2 (10.5) | 0.397 | 1 (3.4) | 3 (10.7) | 0.292 | 0 (0.0) | 4 (10.0) | 0.231 |
| あてはまらない | 37 (94.9) | 17 (89.5) | | 28 (96.6) | 25 (89.3) | | 17 (100.0) | 36 (90.0) | |
| 時期にあった調理形態が分からない | | | | | | | | | |
| あてはまる | 3 (7.7) | 1 (5.3) | 0.603 | 1 (3.4) | 3 (10.7) | 0.292 | 1 (5.9) | 3 (7.5) | 0.657 |
| あてはまらない | 36 (92.3) | 18 (94.7) | | 28 (96.6) | 25 (89.3) | | 16 (94.1) | 37 (92.5) | |

†未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。
質問項目に対する回答の割合は、未回答を除いた割合を示した。
‡カイ二乗検定またはFisherの正確確率検定

たがっていた」、「落ち着いて座って食事ができなかった」、「手づかみ食べやスプーン食べの時、手を振り回して食材を床まで散らかした」、「三角食べができなかった」等の記述が得られた。核家族でない世帯において、困りごとがある者の割合が有意に高値を示した ($p < 0.05$)。また、離乳食づくり担当者が調理することが「好き」と回答した場合は調理することが「好きではない」と回答した場合と比べて、調理することが「苦にならない」と回答した場合は「苦になる」と回答した場合と比べて、困りごとが

ある者の割合が低値傾向であることが示された (それぞれ $p = 0.052$, $p = 0.078$)。

子どもが食物アレルギーと診断されたと回答した者は 9 名 (13.4%) であった。子どもが食物アレルギーを有する場合も、離乳食づくりに関する項目について、有意な差は認められなかった。

(2) 乳幼児向けの非常食の備蓄状況

子どもが離乳を完了するまでの時期に非常食を備蓄することに対する考えとして、「かなり必要性を

Table 4 Problems when transitioning to baby food (for children)

| | 家族構成 | | p値 [‡] | きょうだいの有無 | | p値 | | | |
|--------------------------------|--------------------|------------------|-----------------|--------------|-----------------|-----------------|------------------|----------------|-----------------|
| | 核家族 (n=43) | その他 (n=24) | | なし (n=21) | あり (n=46) | | | | |
| | n [†] (%) | | | | | | | | |
| 困りごとの有無 | | | | | | | | | |
| あり | 26 (60.5) | 20 (83.3) | 0.046 | 15 (71.4) | 31 (67.4) | 0.487 | | | |
| なし | 17 (39.5) | 4 (16.7) | | 6 (28.6) | 15 (32.6) | | | | |
| 食べる量が少ない | | | | | | | | | |
| あてはまる | 12 (27.9) | 3 (12.5) | 0.125 | 4 (19.0) | 11 (23.9) | 0.458 | | | |
| あてはまらない | 31 (72.1) | 21 (87.5) | | 17 (81.0) | 35 (76.1) | | | | |
| 食べる量が多い | | | | | | | | | |
| あてはまる | 4 (9.3) | 1 (4.2) | 0.406 | 3 (14.3) | 2 (4.3) | 0.173 | | | |
| あてはまらない | 39 (90.7) | 23 (95.8) | | 18 (85.7) | 44 (95.7) | | | | |
| 食べ物をいつまでも口にためている | | | | | | | | | |
| あてはまる | 2 (4.7) | 1 (4.2) | 0.710 | 1 (4.8) | 2 (4.3) | 0.683 | | | |
| あてはまらない | 41 (95.3) | 23 (95.8) | | 20 (95.2) | 44 (95.7) | | | | |
| 食べるのを嫌がる | | | | | | | | | |
| あてはまる | 4 (9.3) | 5 (20.8) | 0.170 | 4 (19.0) | 5 (10.9) | 0.292 | | | |
| あてはまらない | 39 (90.7) | 19 (79.2) | | 17 (81.0) | 41 (89.1) | | | | |
| もぐもぐ、かみかみが少ない (丸のみしている) | | | | | | | | | |
| あてはまる | 9 (20.9) | 9 (37.5) | 0.120 | 7 (33.3) | 11 (23.9) | 0.301 | | | |
| あてはまらない | 34 (79.1) | 15 (62.5) | | 14 (66.7) | 35 (76.1) | | | | |
| 食べ物の種類が偏っている | | | | | | | | | |
| あてはまる | 14 (32.6) | 8 (33.3) | 0.578 | 6 (28.6) | 16 (34.8) | 0.417 | | | |
| あてはまらない | 29 (67.4) | 16 (66.7) | | 15 (71.4) | 30 (65.2) | | | | |
| | 調理することは | | p値 [‡] | 調理することは | | p値 [‡] | 調理することは | | p値 [‡] |
| | 好き (n=40) | 好きではない (n=20) | | 得意 (n=30) | 得意でない (n=29) | | 苦にならない (n=17) | 苦になる (n=42) | |
| 困りごとの有無 | | | | | | | | | |
| あり | 27 (67.5) | 18 (90.0) | 0.052 | 22 (73.3) | 22 (75.9) | 0.531 | 10 (58.8) | 34 (81.0) | 0.078 |
| なし | 13 (32.5) | 2 (10.0) | | 8 (26.7) | 7 (24.1) | | 7 (41.2) | 8 (19.0) | |
| 食べる量が少ない | | | | | | | | | |
| あてはまる | 9 (22.5) | 6 (30.0) | 0.370 | 8 (26.7) | 7 (24.1) | 0.531 | 5 (29.4) | 10 (23.8) | 0.444 |
| あてはまらない | 31 (77.5) | 14 (70.0) | | 22 (73.3) | 22 (75.9) | | 12 (70.6) | 32 (76.2) | |
| 食べる量が多い | | | | | | | | | |
| あてはまる | 2 (5.0) | 3 (15.0) | 0.201 | 1 (3.3) | 4 (13.8) | 0.166 | 0 (0.0) | 5 (11.9) | 0.170 |
| あてはまらない | 38 (95.0) | 17 (85.0) | | 29 (96.7) | 25 (86.2) | | 17 (100.0) | 37 (88.1) | |
| 食べ物をいつまでも口にためている | | | | | | | | | |
| あてはまる | 2 (5.0) | 1 (5.0) | 0.745 | 2 (6.7) | 1 (3.4) | 0.513 | 1 (5.9) | 2 (4.8) | 0.647 |
| あてはまらない | 38 (95.0) | 19 (95.0) | | 28 (93.3) | 28 (96.6) | | 16 (94.1) | 40 (95.2) | |
| 食べるのを嫌がる | | | | | | | | | |
| あてはまる | 6 (15.0) | 3 (15.0) | 0.658 | 6 (20.0) | 2 (6.9) | 0.138 | 1 (5.9) | 7 (16.7) | 0.260 |
| あてはまらない | 34 (85.0) | 17 (85.0) | | 24 (80.0) | 27 (93.1) | | 16 (94.1) | 35 (83.3) | |
| もぐもぐ、かみかみが少ない (丸のみしている) | | | | | | | | | |
| あてはまる | 10 (25.0) | 7 (35.0) | 0.303 | 10 (33.3) | 7 (24.1) | 0.312 | 2 (11.8) | 15 (35.7) | 0.059 |
| あてはまらない | 30 (75.0) | 13 (65.0) | | 20 (66.7) | 22 (75.9) | | 15 (88.2) | 27 (64.3) | |
| 食べ物の種類が偏っている | | | | | | | | | |
| あてはまる | 14 (35.0) | 8 (40.0) | 0.459 | 11 (36.7) | 11 (37.9) | 0.567 | 5 (29.4) | 17 (40.5) | 0.312 |
| あてはまらない | 26 (65.0) | 12 (60.0) | | 19 (63.3) | 18 (62.1) | | 12 (70.6) | 25 (59.5) | |

[†]未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。

[‡]質問項目に対する回答の割合は、未回答を除いた割合を示した。

[‡]カイ二乗検定またはFisherの正確確率検定

感じる」と回答した者は35名(53.0%)、「少し必要性を感じる」が30名(45.5%)、「あまり必要性を感じない」が1名(1.5%)であり、「必要性を感じない」と回答した者はいなかった。

離乳開始前の子ども向けに非常食を備蓄していたのは49名(75.4%)であった。非常食を備蓄するこ

とに対して「かなり必要性を感じる」と回答した者では84.8%の割合で離乳開始前の子ども向けに非常食を備蓄しており、「少し必要性を感じる」と回答した者の63.3%と比較し有意に高値を示した($p < 0.05$)。備蓄内容として、「粉ミルク」を選択した者は49名(75.4%)、「調乳用の水」を備蓄していた

のは33名(50.8%)、「プラスチック製の哺乳瓶や乳首」を備蓄していたのは19名(29.2%)、「紙コップやスプーン」を備蓄していたのは13名(20.0%)であった。粉ミルクを備蓄していると回答した者のうち、33名(67.3%)が「調乳用の水」、19名(38.8%)が「プラスチック製の哺乳瓶や乳首」、13名(26.5%)が「紙コップやスプーン」も備蓄していたと回答した。粉ミルクを備蓄していた者の割合は、子どもが生後1か月(3か月)時点で人工栄養の場合は100.0%(89.5%)、混合栄養では76.0%(72.7%)、母乳栄養では70.0%(68.2%)であった。備蓄をしていない/していなかった理由として、「母乳栄養のため必要性を感じなかった」、「粉ミルクは一切飲まなかった」、「非常時のことまで考えていなかった」、「廃棄するのがもったいないと思った」、「備蓄する経済的な余裕がなかった」等の自由記述が得られた。なお、「液体ミルク」を選択した者は2名(3.1%)であった。

離乳期の子ども向けに非常食を備蓄していたのは53名(81.5%)であった。非常食を備蓄することに対して「かなり必要性を感じる」と回答した者では94.1%の割合で離乳開始前の子ども向けに非常食を備蓄しており、「少し必要性を感じる」と回答した者の65.5%と比較し有意に高値を示した($p < 0.01$)。備蓄内容として、「市販のベビーフード」を選択した者は42名(65.6%)、「育児用ミルク」を選択した者は25名(39.1%)、「子ども向けにアレンジして与えられる大人用の非常食」を選択した者は18名(28.1%)であった。その他と回答した者からは、おやつ、パン、ヨーグルト等の回答があった。市販のベビーフードは、平均4.8日分の備蓄をしているという回答が得られ、一番少ない者は2日分、一番多い者は14日分という結果であった。備蓄をしていない/していなかった理由として、「離乳食を作っていた」、「大人と同じ食べ物を口にできる」、「考えがなかった」、「備蓄する経済的な余裕がなかった」等の自由記述が得られた。

子ども向けの非常食の備蓄状況について、離乳開始前と離乳期のいずれにおいても、子どもの食物アレルギーの有無で有意な差は認められなかった。

4. 考察

本研究では、福島県内のこども園に通う園児の保護者を対象とし、家庭における離乳食づくりの実態

ならびに乳幼児向けの非常食の備蓄状況の把握を目的として解析を行った。

乳幼児栄養調査結果¹⁾では、離乳食について困ったことの内容として、「作るのが負担、大変」、「もぐもぐ、かみかみが少ない(丸のみしている)」、「食べる量が少ない」、「食べ物の種類が偏っている」等が上位にあがった。本調査においても、これらの項目が困ったことの内容として上位にあがり、半数以上の者が離乳食を「作るのが負担、大変」だと考えていることが示された。本研究では、世帯構成や離乳食づくり担当者の調理に対する考えが、離乳食を進める際の困りごとや離乳食の状況と関連しているという仮説を立ててさらに解析を行った。その結果、子どもが一人っ子的場合は、「作り方が分からない」、「食べさせ方が分からない」といった困りごとを抱えていたことから、ロールモデルとなる子どもが身近にいない家庭をメインターゲットとし、保健センターや保育所等の地域の子育て家庭をサポートする施設において、保護者同士をつなぐ場を設定することや、実践を伴う情報提供等を行うことが有効であると考えられた。自由記述の結果から、子どものために離乳食を作る際に、調理方法の情報に従って忠実に時間を再現し、使用する食材を揃えようとする者の存在も伺えたが、調理する際は調理器具や使用する食材、火加減等によっても出来栄が変わることから、情報提供の際はあくまで目安であることを伝えることも必要であろう。その他にも、本研究では、離乳食づくり担当者が調理することが「得意でない」場合や「苦になる」場合は、離乳食に関して困りごとを抱えている者の割合が有意に高いことが示された。離乳食づくり担当者が調理することが「得意でない」場合は、離乳食のバリエーションや作り方に関する情報提供が、離乳食づくり担当者が調理することが「苦になる」場合は、簡単に特別な食材を使用しない離乳食の作り方の提案や離乳食づくりの負担感を減らす声掛け等が必要になると推察されたが、今後さらに詳しく検討する必要がある。調理するのが「好きではない」と回答した者では、離乳食を「まとめて作って冷凍保存」することを「知らなかった」あるいは「活用しなかった」と回答する者の割合が高かった。まとめて作ると楽だと考える人がいる一方で、「作り置きするのに時間がかかってしまうこと」、「小分けに保存しても使い切ることができないこと」、「大人とは別メ

ニューとして作ること」が負担、大変だと捉える人もいることから、生活スタイルを考慮し、離乳食の作り置きが合っている人に向けた方法、大人の料理と一緒に離乳食を作ることが合っている人に向けた方法のように、調理担当者の調理に対する考え別にパターン化し、情報提供を行うことが、困りごとの解消につながるのではないかと推察された。離乳食の作り置きが生活スタイルに合っている場合で、作り置きした離乳食を余らせてしまうという悩みを持つ者に対しては、「離乳食の大人の料理へのアレンジ」についての情報提供が効果的と考えられた。

非常食の備蓄状況については、乳幼児向けに非常食を備蓄することの必要性を感じながらも備蓄できていない家庭が多い、母乳栄養でも育児用ミルクの備蓄が推進されているが子育て家庭には周知されていない、育児用ミルクの備蓄があっても哺乳瓶や調乳用の水等の備蓄は十分ではない、食物アレルギーを持つ子どもの家庭においても非常食の備蓄が不十分であるという仮説を立て、解析を進めた。2018年に日本全国47都道府県を対象に実施された「家庭の備蓄状況」についてのアンケート調査¹²⁾によると、乳児のいる家庭において、子どものために災害対策として粉ミルクを備蓄していると回答したのが30.7%、離乳食については22.9%、哺乳瓶については20.9%であったことが報告されている。本研究において、離乳開始前の子ども向けに粉ミルクを備蓄していたのは75.4%、プラスチック製の哺乳瓶や乳首を備蓄していたのは29.2%であった。また、離乳期の子ども向けに育児用ミルクを備蓄していたのは39.1%であり、市販のベビーフードを備蓄していたのは65.6%であった。本調査の対象が東日本大震災の影響を大きく受けた福島県であったことから、全国と比較すると、子ども向けの非常食を備蓄していた者の割合が高くなったと考えられ、災害時の備えに対する意識の違いが結果に表れたのだと推察された。乳児用ミルクやベビーフード等の特殊食品は、自助努力による備蓄が原則であるが、福島県以外の多くの県においては、家庭における子ども向けの非常食の備蓄状況がより深刻であることが危惧された。また、本研究では、離乳開始前の子ども向けに非常食を備蓄していたのは約75%、離乳期の子ども向けに非常食を備蓄していたのは約80%と、乳汁のみではなく「離乳食」を摂取するようになってからの方が備蓄する者の割合が増えることが示された。離乳

開始前の子ども向けに非常食の備蓄をしていなかった者からは、「母乳栄養のため必要性を感じなかった」、「粉ミルクは一切飲まなかった」、「廃棄するのがもったいないと思った」といった自由記述が得られたが、被災時にはストレスや栄養不足によって母乳が出なくなることもあるため¹⁾、母乳のみで養育している場合も粉ミルク等を備蓄する必要があることについて周知すべきであろう。今後は、特に母乳栄養児の保護者に対する適切な情報提供が望まれた。また、被災時に母乳以外の乳汁を与える際は、断水していることや、衛生的な水が使用できなくなることを想定し、調乳するための水や、授乳する際に使用する哺乳瓶や乳首、紙コップやスプーン等を準備しておく必要がある。しかし、粉ミルクを備蓄していると回答した者でこれらを備蓄していたのは、それぞれ67.3%、38.8%、26.5%であった。粉ミルクのみならず、調乳のための水や授乳時の哺乳瓶等の備蓄を行うことの必要性を伝えることが今後の課題と考えられた。離乳期の子ども向けの非常食の備蓄をしていなかった者からは、「離乳食を作っていた」、「備蓄する経済的な余裕がなかった」といった自由記述が得られたことから、市販のベビーフードは、離乳食をすべて手作りしている家庭においても、調理のバリエーションを増やし、出かける際等にも便利なものであること、離乳期の子ども向けの非常食として特別なものを購入しなくても、市販のベビーフードが非常食としての役割を果たすことを伝えることが必要であろう。さらに、子どもが離乳を完了するまでの時期に非常食を備蓄することに対して、「かなり必要性を感じる」と回答した者は、「少し必要性を感じる」と回答した者と比較し、非常食の備蓄状況が良好であったことから、自分ごととして非常食の備蓄の必要性が強く感じられるような働きかけが必要であろう。粉ミルクや離乳食の選択時により細かな配慮が必要な食物アレルギー児の保護者と、食物アレルギーを有しない児の保護者を比較したとき、非常食の備蓄状況に差が認められなかったという結果が得られ、食物アレルギー児の保護者への対応も含めて検討することが重要と考えられた。

本研究には、以下に述べる限界がある。まず、調査対象が1園のみであり、対象者数が少なかったことである。そのため、回答状況に偏りがある項目に関しては、関連のある要因について検討することができなかった。また、質問項目で得られる答えの妥

当性と信頼性についての検討を十分に行うことができなかつたことも課題である。今後は調査対象を拡大し、縦断研究も視野に入れ、本研究結果から抽出された課題に対して効果的だと推察された対処法についての検討等、より詳細な検討も行いたい。

以上のような限界は有するものの、本研究では、家庭における離乳食づくりの実態、福島県内のこども園に通う乳幼児の家庭における離乳開始前・離乳期の非常食の備蓄状況を示すことができた。得られた結果は、家族構成を配慮し調理担当者の考えに寄り添った離乳の支援、乳幼児の保護者に対する子ども向けの非常食備蓄に関する適切な情報提供のための基礎資料となることが期待される。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご支援、ご協力賜りました聖愛こども園の先生方、そして対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究の一部は、日本女子大学特別重点化資金の助成を受けたものである。

文 献

- 1) 厚生労働省：平成 27 年度 乳幼児栄養調査結果の概要，<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000134208.html> [2021.10.5]
- 2) 厚生労働省：幼児健康度に関する継続的比較研究 平成 22 年度 総括・分担研究報告書，https://www.jschild.or.jp/book/pdf/2010_kenkochousa.pdf [2021.10.5]
- 3) 大嶽麻衣他：東海公衆衛生雑誌，5，69-76 (2017)
- 4) 柴田(石渡)奈緒美他：日本調理科学会誌，53，25-33 (2020)
- 5) 山田佳奈実他：日本栄養士会雑誌，58，517-526 (2015)
- 6) 中岡加奈絵他：日本食育学会誌，12，219-230 (2018)
- 7) 中岡加奈絵他：日本食育学会誌，15，39-48 (2021)
- 8) 内閣府：防災に関する世論調査，<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-bousai/index.html> [2021.10.5]
- 9) 独立行政法人国民生活センター：災害に備えた食品の備蓄に関する実態調査，http://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20210304_1.html [2021.10.5]
- 10) 厚生労働省：授乳・離乳の支援ガイド（2019年改定版），https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_04250.html [2021.10.5]
- 11) 東京都福祉保健局：妊産婦・乳幼児を守る災害対策ガイドライン（平成 26 年 3 月改訂），http://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/s_hussan/nyuyoji/saitai_guideline.html [2021.10.5]
- 12) 日本気象協会推進 トクする！防災：「家庭の備蓄状況」に関するアンケート調査，<https://tokusuru-bosai.jp/try/try10.html> [2021.10.5]

